

未来ノート

-202Xの君へ-

卓球

平野美宇



①インタビューに答える平野美宇②特注ユニホームをプレゼントされ、はしゃぐ4歳の平野美宇③真理子さん提供

お留守番イヤツ母の教室に

「ママの卓球教室に入れて」。平野美宇(17)の生まれて初めてのねだりだった。泣き叫びながら、母・真理子さん(48)の服の袖を引っ張ってせがんだという。3歳5カ月になる2003年9月のことだ。

筑波大卓球部の主将も務めた真理子さんは、山梨県中央市の自宅2階で卓球教室を開いていた。平野は「1階でお留守番をしてい

たけど、離れるのが嫌で……。『絶対やりたい』って、おねだりした」。翌日も、平野は泣いてせがんだ。普段は聞き分けのよかった娘の姿を見た真理子さんは言った。「教室のみんなの迷惑にならないくらい上手になったら、入れてあげる」。こうして、ラケットを握ることになった。

最初の練習は5分だけだった。「うまくならなかったら教室に入れない。プレッシャーがあった」と平野。真理子さんは「何でも没頭する性格。折り紙がよれよれになるまで、鶴を折ることもあった」と語る。4歳になる直前の04年4月。願いがかなって教室に入り、地域の大会に出場した。「対戦相手も応援してくれたのを覚えている」。家族が特注の小さなユニホームをプレゼントしてくれたこと

とも、とてもうれしかった。特別支援学校教師だった真理子さんは、飽きないよう遊び感覚の練習を探り入れた。ラリーが続いた回数だけ基石を並べたり、大好きなキティちゃんのぬいぐるみを台に乗せて的当て練習をさせたりした。

そして小学1年生になった07年7月、全日本選手権パンピの部(小2以下)で初優勝。試合後のインタビューで「夢は五輪で金メダル」と初めて言った。「夢はキティちゃん屋さんじゃないの」と母に尋ねられると「違うのよ」と返した。「お花屋さんとかケーキ屋さんの感覚で『キティちゃん屋さん』と言っていた。でも、五輪をもっと目指そうと思って」。明確な夢ができた瞬間だった。(前田大輔)

最初のおねだり

一人でやりきる

悔しさをバネに

金メダルを取る

◆「未来ノート」スクラップブックは、全国のASA(朝日新聞販売所)でお配りしています。インターネットの特設ページではイベントやスクラップブックについて詳しく紹介しています。「未来ノート 朝日新聞」で検索してください。

©朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。